



TITLE:

北日本の[聚]落(一)

AUTHOR(S):

西龜, 正夫

CITATION:

西龜, 正夫. 北日本の[聚]落(一). 地球 1928, 9(3): 193-198

ISSUE DATE:

1928-03-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/183408>

RIGHT:

も立派な火山彈が硅鑛中から發見された事は、疑もなく石英粗面岩の角礫が壓碎角礫では無いといふ證據であつて、著者の考説を花岡鑛床まで擴張する爲には頗る有力な材料たるを失はな

北日本の聚落 (一)

いのである。
終りに臨み、この火山彈を保存し置き著者に與へられた澤畑榮君の好意を深謝する。

西 龜 正 夫

昨夏北海道からカラフトへ旅行の機會を得たので、その往復に奥羽の東岸と西岸とを通つてつまり北日本なるものを一週することが出来た。成るべく會遊の地を避けて新しいコースをとつたので二十日間の見聞が私には珍らしいことばかりであつた。そこで當時のノートの中から聚落に關したことのみを抜き出して纏めて見たのが本篇である。併し元來が多くは汽車の窓からの瞥見であるし、豫備智識が不充分な上に觀察は粗雑と來て居るから、とてもほんどうの纏つ

たものは出來つこない。況や一局部に就ての徹底した研究などは始めから期待しない事なので、たゞ北日本の全體に就て概觀したといふ點と、私が元來南日本にのみ生活して居るが故に所謂岡目八目といふわけでいくらか着眼點を異にするかも知れないこと、が、本篇のどりえだと言へば云へよう。その代り大きな見當違ひや誤解も少くないことと思ふから、その點は諸賢の教へを受けたいと思ふ。それに材料が貧弱であるからとても科學的に系統を立てゝの記述は出來

ない。ほんの隨筆位の氣持で讀んで頂きたい。

形　　と　　色

先づ大體の感じから云ふと北日本の聚落は概して明るい氣分に充ちて居る。尤も明るい云つても山陽や近畿の黒瓦、白壁と云つたものや九州地方の赤瓦、赤壁と云ふけばばしいものとは趣を異にするが、どうも九州あたりの聚落に比べると何處となく明るい。それは第一には屋根の材料によることであるし、第二には周圍の立木の模様にもよることと思ふ。九州地方では黒い瓦屋根か又は藁屋根に限られて居て、たまに見る竹屋根にしても多くは薄黒いのであるが、北日本では藁屋根の外は多くは柿ぶきでありその間にトタン屋根の白い色が交る。北海道あたりに行くど土の壁も少くなつて板壁が多くなるといふ風であるから、それが聚落の外觀を著しく明るいものにするのである。

立木は家の周圍にあつてもあまり濃厚に家を穩すといふことをしない。九州では藪や叢林の

中に僅かに屋根が隠見するといふ様なものもあるが、北日本にはそんなものがあまり見當らぬ多くは家の周圍に一系列の立木を作るといふ程度である。

それは又北日本の家は概して大きく、そのために屋根も高いといふことがある様にも思へる小さい家は低く且つ陰氣に見えるものである。たとひ森の中に隠見する家でも、相當に大きいと一種の威嚴があつて立木のために壓倒せられない。

或は植物の生長が幾分遅いといふ様なことがあるかも知れぬ。竹などの少いと云ふ様なことも關係して居るであらう。仙臺平野でも見たことであるが古い聚落は杉をめぐらし、新しい聚落はポプラをめぐらすものが多い様である。どちらにしても疎林であつて聚落を押しからすほどには繁つて居ない。阿武隈川下流の平野にある村落も、ポプラを廻らす明るい村落が多い。北海道ではまだ原生林の伐り残りらしいものが家の周圍を取りまくものもある。それは多く

は畑地で見えるもので、水田では多く無立木となつて居て、新しく防風林として植ゑたらしいものが所々に見られるのみである。併しどちらにしても北海道の聚落は森の中にかくれては居ない。

常磐線の我孫子^{アビゴ}から取手のあたりには所々に森林村落が見られる。それは一戸一戸の散村もあり、又疎集村落もあるが概して生活が有福らしく見える。東北線の石城附近にもこれに似た林間の散点村落があつて、各戸は母屋の外に一、二棟の附屬家を有し、土藏を有するものもあつて何處となく生活の餘裕を示して居る。

カラフトの聚落は尙一層明るいものである。それは概して建築がまだ新しいからでもあるが又全然木造ばかりであるといふ様なことも關係して、如何にも火事場のあとのブラックを思はせる。それに散村などはまだ極めて稀で多くは集村をなして居り、周囲の防風林などもまだ調つて居ないから云はゞむき出しの聚落である。鐵道の驛を中心とする木材集散の村落と、海岸

の入江などに見る漁村との二つが主なタイプで、どちらも防風林は極めて少い。

漁村は殊に立木を有しないのが普通である。噴火灣岸の黄金^{ウツン}藥あたりに見る様に防風のためには家の周圍にキビわらの垣をめぐらす。北とか西とか主風の方向は完全にこれで防いで居たその外觀は一寸朝鮮の村落に似かよつたものであるが、垣の方が家よりも低いから朝鮮の村落の様に陰氣では無い。

常磐線の久の濱附近にも多くの漁村があるが立木は更に無い様で、立木を有するものは少し海岸を離れた農村に於てのみ見られる。沖を見はらすことの必要から來るのかどうだか斷言は出來ないが、北見沿岸の漁村には森は極めて少い様である。

酒匂川の平野にある村落は林間にあるものと畑の中にあるものと水田の中にあるものとの三種の種類の分たれる様に思ふ。もとよりその三種の間に差違が見られることは云ふ迄もないが林間村落は多くは竹藪を切り開いて所々に家を

つくつたといふ風であり、畑の中にあるものや水田の中にあるものはあとから植えたらしい立木をめぐらして居る。

一體に山地では散村が多く平地には集村が多い様である。中國あたりに見る様な平地の散村はあまり見あたらない。そして山地の集村は原始的の森の中にあり、平地の集村は人工的の立木をめぐらすものが多い様な傾向がある、尤も幾多の例外もあるから一概に斷定は下されないたゞ一つ珍らしく思つたのは北海道の石狩平

野あたりに見る散村である。云ふ迄もなくこれは屯田兵の村で、耕地を幾何學的に一定の面積に區切り、一區に一戸つゞ一定の家屋を建てたのであるから、家は凡て同じ型の同じ大きさで同一の間隔を保ち、且つ一直線上に並んで同じ方向に向いて居るといふ誠に型にはまつたものである。札幌や旭川の市街が整然たる街衢を有するので好一對の植民地景觀である。

屯田制度の廢せられてから已に數十年になるが、まだその景觀には大した變化が無い。併し

江別附近でも見られる様に、住民が多くなるにつれて孤立して居た一戸の農家を中心に三五戸の疎集村落が次第に出來て行く傾向がある。平野のことであるから將來はその疎集村落も密集村落になりはしないかと思ふが、兎に角作物の變化と耕作法の改良と地方の増進とで、だん／＼變化して行くのであつて、その變化の經路を詳細に調べたら面白いことがあるだらうと思はれる。

位置と方向

仙臺の平野に於て所々に存在する聚落の位置が概して附近の地よりも少し高くなつて居る部分に多い傾向を見た。これは筑紫平野の東部に於ては殊に著しいことで、一體の地形が古い河道の跡や何かで云はゞ鹿子絞りの様になつて居る場合、聚落は多くその高い部分に位置するものであつて、これは恐らくは洪水の時に其害を免れ易いといふことが根本の原因ではないかと思つて居る。この事は筑紫平野に就て論ずるな

らは可成りの材料もあるのだが、今は單に仙臺附近に於てそれに似た様な事實を瞥見しただけで、確かな資料を得て居ないから深く立ち入ることは避ける。

丘陵地であるど何處でも聚落は丘陵の麓に出来る傾向がある。そして人口の増加につれて麓の聚落が次第に丘陵の中腹に擴つて行く。そう云ふ場合の家の方向を見ると概して丘陵を背にし、又斜面では高い方を背にして低い方を見下す様になつて居る。但し一方に於て成るべく南又は東に向はんとする所謂『向日性』といふものがあるから、西向や北向の斜面には聚落が少くあつてもその傾斜が急でない限りは家は矢張東なり南なりに向つて居る。それに就て著しく感じたのは福島縣の久ノ濱で、家は多く丘陵の南面にあつて、漁村であるにも拘はらず東の方の海には面しないで南向になつた家のみである。斜面の聚落は散村になり易いのは地形上尤もなことである。谷底などの聚落は集村になり易いものだが、併し北海道の陸別リッベツ附近では谷底の

散村もあるから一概には云はれない。小利別や幌別ホウベツ附近では小丘陵の麓や中腹にそれこそ標式的な散村が見られる。一體に北海道には散村が多いと思つた。この點は朝鮮あたりと著しく違つて居る。

北海道や樺太の海岸には到る處に段丘が發達して居る。聚落はその段丘の上にあることもあれば前面にあることもある。前面に聚落がある場合には段丘の上は別の目的に係はれる。例へば、北海道北見の紋別といふ漁村は段丘の前面に發達して居るが、段丘上には神社が建てられて町民崇敬の中心となり又一部遊樂の地ともなつて居る。

噴火灣の北岸にも段丘があつて、そこには疎林が出来て居るが、その林中には點々として農家が散在して居る。そして段丘の下には江線に近く漁村が出来て居る。この農村と漁村とを對比すると前者は一般に建築が古く後者は新しいものが多い。この地方では先づ農業が發達した交通機關の發達につれて後から漁業が發達した

ものであらうか。稀布^{マレツ}の附近には數列の砂丘があつて、その砂丘のかげには農村があり砂丘の前面には漁村がある。共に散村であつてその對稱は段丘の場合とよく似て居る。砂丘の上には巨木があつたらしく今は切株のみが残り草原又は權木の藪となつて居る。

砂丘と云へば秋田縣の二田の附近には、砂丘上が悉く松林となつて居て、その林間に散村が

出來て居るのは珍らしいと思つた。
谷の聚落にあつては家の方向は谷軸に向ふか又は谷口の方に向ふ。これは青森縣の大釋迦の附近にもその適例がある。比較的谷の底の平地に近い處では谷口の方に向ひ谷側の傾斜の急な部分では谷軸に向ふので、これは結局傾斜の方向に平行するといふことになるのである。(未完)

○イラク國の油井

一九二五年三月、イラク國政府が、土耳其石油會社に對しバラス州を除くモスル及バグダート二州内に存する油田探掘權を七十五年間に互り許可した、然るに昨年十月十七日モスルの東南、^{Baghdad} 北方四哩の地點にあるババグル^{Babagur}に於て試掘油井から一日五千噸内外の石油が出たので世界の驚きになつた、同油井は開鑿僅に一、五〇〇呎で一日五千噸の噴油を見たとの事である、同會社の試掘地はこの外に目下モスルの南方三十八哩の地點にあるグアイヤラ^{Gaiyala}。キルクツクの東南約八哩にあるタルギル^{Targir}。タングの東方四哩にあるジャムアル^{Jamul}。ズスグルマツの南方六哩にあるバルカナ等である。この中で三油井は石油存在の兆候がある。この後果してババグルの井のやうに成功するやは不明であるが、この地から地中海へ鐵管を布設するために延長約六百哩の面倒があるのが、何よりの痛手である、この地の石油は一世紀前から火爐と呼ばれ天然瓦斯が出た所で、土人は昔から原油を取つてゐた地であつた。この外にガラ油田はチグリス河畔にあつて最良油田の稱があり幾多の石油の池があるが、流れてエルフアタフアの絶壁からチグリスの濁流に入つてゐる。チエムチエマの南方にあるグイル油田も最良の燈油だと稱せられ、モルムード油田は石油が自然に地表に湧いて出でゐる。又前記のズスグルマツの油田はイラク國內で最豐富な油田の一で、一哩以上も石油の流が出來、アスファルトの幾多の層がある、ザル^{Zal}にも湧出地があり、ヒツト、ラマデイ等にも瀝青の泉が散在してゐる。何れにしてもイラクには石油の見込が多い裏海沿岸のバグラーや米國及メキシコと相並んで將來世界に於ける石油業の中心となることは疑を要しないことであるらしい。